# 器楽授業におけるピアノ指導上のコミュニケーションについての考察

## 保育士、幼稚園・小学校教諭養成校のピアノレッスンでの実践

澤田　綾子

The Study of Communication through teaching the Piano in Instrumental Music Classes
The practices at the training schools for the teachers of elementary schools and kindergartens

Ayako SAWADA

キーワード：音楽のはたらき　ピアノ演奏技術　コミュニケーション技術

### １．はじめに

保育園、幼稚園、小学校という初等教育において、音楽は、子供達の心身の発達にとって大きな役割を担っている。

本学の器楽の授業では、グループ内での個人レッスンにより、ピアノの演奏技術と歌唱教材の弾き歌いを習得する。単に資格を取るためだけではなく、現場で実際に役立つ技術を身につけてほしいと願って指導にあたっているが、手の使い方や、運指などの技術的な指導において、その必要性がうまく学生に伝わっていないケースが多く見られる。そのため技術面の向上を学生自身が納得した上で、自主的に練習していくためのアプローチを試みてきた。

学生側の意識、授業の受け止めのリサーチはアンケートで行った。

指導内容の伝達にコミュニケーション技法を用いることにより、音楽は楽しい、もっと上手くなりたいと自然と思えるような雰囲気作り、学習と技術習得に必要な基礎事項の当たり前化（グループメンバー全員が当然と思っている）を目指してきた。授業内の事例と、アンケート結果を通して考察していきたい。

### ２．音楽のはたらき

筆者は、音楽療法士として、高齢者施設、発達障害者施設などにおいて音楽活動を行っているが、言葉では届かない深さにまで働きかけていく音楽の力には目をみはるものがある。

音楽療法学会による音楽療法の定義では、音楽には、生理的、心理的、社会的という３つのはたらきがあるとされている。

（１）生理的はたらき

1）音楽は、感覚ニューロン（神経細胞）を通して大脳皮質の感情中枢に大きな影響を与える。

2）音楽は、自律神経系に賦活的、あるいは抑制的な影響を与える。

3）音楽は、大脳皮質の運動中枢に賦活的、あるいは抑制的な影響を与える。

4）音楽は、長期記憶において、いろいろな出来事と結びつきやすい性質を持っている。

5）音楽は、認知的なプロセスを刺激する。

（2） 心理的・社会的はたらき

1）音楽は、知的過程を通らずに直接情動に働きかける。

2）音楽活動は、自己愛的な満足をもたらしやすい。

3）音楽は、人間の美的感覚を満足させる。

4）音楽は、発散的であり、情動の直接的発散をもたらす方法を提供する。

5）音楽は、身体的運動を誘発する。

6）音楽はコミュニケーションである。

7）音楽は、一定の法則性の上に構造化されている。

8）音楽には多様性があり、適用範囲が広い。

9）音楽活動には、統合的精神機能（外から入ってきた刺激を上手く統合整理し、適切な行動を導くはたらき）が必要である。

10）集団音楽活動では社会性が要求される。（引用　春秋社　標準音楽療法入門　理論編）

初等教育においても、音楽のこの３つのはたらきは、身体の発達、情緒の発達、社会性の発達を促すという重要な役割を果たすと考えられる。従って、将来初等教育の現場において、音楽を提供する側になる学生たちには、音楽が子供たちの発達に多大な影響を持つということを十分踏まえて学習していってほしい。

そのために、いい音を出す、滑らかに演奏する技術と、歌なら歌詞の内容の表現、行事などの場面においては音楽が持つ役割に必要な表現、ができるような力を十分身につけていってほしい。

## ３．ピアノ実技の技術的側面において起こりやすい問題

ピアノは、弦楽器や管楽器と違って、音を出すこと自体は容易である。鍵盤を押せば、音が出るし、調律さえされていれば正しい音程を出すのも容易である。弦楽器や管楽器の学習では、まず音を出す発音自体が難しい楽器もあり、音程についても初歩の段階から自分でよく聴きながら音を作らなければならないのに対し、ピアノでは容易に音が出るため、聴きながら音を作るという意識が育ちにくく、ただ鍵盤をバタバタと押していくような演奏になりがちである。

声楽や管楽器では、正確な音程を作るためには、自分の身体をその音が出る状態に持っていかなければならないのに対し、ピアノは奏者の身体の状態を変えなくても音を出せるので、楽器の発音と自分の身体の状態が一体化しにくい。ピアノ演奏において表現が平板になりがちなのは、このことにも原因がある。

ピアノでは音と音をつなげて演奏することも、弦楽器、管楽器に比べると困難である。ピアノは、弦をハンマーで打って音を出す構造になっているため、円滑な演奏にするには、指の独立、手や腕の使い方を習得しなければならない。細かい音の連続するパッセージでは、指の都合により音の長さにムラが出たり、５指の強さが違うため音の大きさにムラが出たりしてしまう。これは、五指の独立が習得されていないため指のコントロールができず、起こることである。

運指（指使い）についても、「音が合ってるんだからいいじゃない」と思ってしまう学生

があるが、円滑な演奏のためには、より良い運指があるということと、自己流でやっているためにかえって難しくしている場合もあるので、滑らかに弾けていない時には、運指を変える指導も必要である。

以上がピアノ演奏での初歩の技術上の問題点である。

幼稚園の歌の伴奏においては、高度なピアノ曲を弾くときのようなテクニックはいらないと思われがちである。

しかし、単に音が合ってればいい、とか、とにかく弾いていればいいということではなく、より良い音色で、丁寧にリズムよく演奏することにより、癒しとエネルギーを与えるという、音楽が本来持っているポテンシャルを発揮できるので、指をきちんと鍛え、いい音で、リズムに乗って演奏できることを身につけていくことが望ましい。

また、初歩の段階できちんとした奏法を身につければ、より少ない時間で一つの曲をマスターできるようになるので、音楽だけをやっていられない環境にあるからこそ、正しい奏法を身につけ、職場に入ってからも、ピアノで困ることがないようにしてほしいと願う。

### ４．グループ内の個人レッスンでの問題点

器楽の授業は、５～７人のグループで行う。大抵は、さらに２グループに分け、練習するグループとレッスンを受けるグループで１限内を交代でレッスンを受ける。

必要に応じて、グループ全員でリズム練習などをすることもあるが、ほとんどの時間はグループ内での個人レッスンである。

個人レッスンなので、一人一人違う学生に対し、同じことを同じように受け止めてくれるよう伝えることが必須である。同じ言葉遣いをしても、学生の性格や、意欲、持っている予備知識などにより受け止め方に違いが生じる。

また、それぞれの学生によって今克服するべき課題が違うため、その課題がクリアできていないから合格しなかった場合でも、他の人と同じように弾けているのに合格できなかった、と思ってしまう学生もある。そうなると教師が好き嫌いで合格を左右しているというような誤解も生まれる。

そういった誤解や、受け止めの違いをいかになくしていくか、ということを考えると、言葉のかけ方や言葉づかい、説明を納得しているかどうかの見極め、一人一人の学生の性格や習熟度、持っている知識に応じた伝え方をする、といった教師側からの働きかけの仕方に工夫が必要になってくる。

また、手の形や、運指を修正する際にも、理屈抜きで「ああして、こうして」と指示するだけでは、受け入れられないことが多い。なぜそうしなければならないかという納得できる説明を加える必要がある。

また、自分の能力を自覚できず、難しいことを無理にさせられているという思いを持ってしまう学生がたまにある。教師は長年、多くの学生を指導してきた経験から、その学生の現状を見れば、どれくらいの所まで進むことができるか大かたの予測がつく。その予測を基に指導していくのだが、学生にとっては未来は見えないので無理なことをさせられて

いる、と思ってしまうことがある。この場合も、能力を自覚させ、ここまではできる、ということを納得させるための働きかけが必要となる。

さらに、クラスやグループのカラーというか、傾向があり、全体的にレッスンを楽しみ、お互いに応援しあって向上を目指す雰囲気ができているグループもあれば、ムードメーカーの発言に気分を引っ張られているグループ、また、個人個人がばらばらに努力していて、みんなで向上していこうという雰囲気に欠けているグループなど様々である。２年間という短い時間で、ある程度役に立つピアノ演奏技術を習得するためには、集団の力が大きな影響を持つので、グループの雰囲気作りに教師側が介入していく必要も出てくる。

授業を行う上で困難に感じたことの解決を模索すると、そのほとんどがこういった、コミュニケーション（伝え方、雰囲気作り、見極めなど）に課題があるということに気づかされる。

## ５．授業内でのコミュニケーション

前項で取り上げたような問題点に対し、年度末に出される授業評価に書かれる学生の声や、授業内での学生が発する言葉や、態度などを、学生からのフィードバックと捉え、学生が意欲と向上心を持ってピアノの練習に励めるよう、改善に取り組んできた。

良い成果を上げるためのコミュニケーション技法を学ぶと、相手のペースに合わせること（ペーシング）により信頼関係（ラポール）を形成し、その信頼関係に基づき誘導（リーディング）し、相手に望ましい変化を起こす、という過程を踏むことが非常に重要であることを知る。

もう一つ大事なのは、場の空気である。場の空気とはその集団の価値観、判断基準であり、この空気の質を高くすることにより、個人が持っている能力を最大限生かせる環境になる。

そうしたことに留意し、学生の向上心、意欲促進を図りながら、学生と接している場面を具体的に挙げてみたい。

１）新学期最初の顔合わせでは、ピアノの経験の有無や習った期間などを聞き取りする。ピアノ経験の情報を得ることが第一の目的だが、話の仕方や、姿勢、態度などからもその学生について多くの情報を得られる。学生たちの答えに対し教師側から、明るく肯定的なフィードバックをし、「なんかちょっと楽しそうだな」という雰囲気を作ることを初回の授業から意識していく。

２）手の構えについても初回から大切さを伝える。

「手の形を細かく直すことが多いけど、手はピアノを弾く道具だからそれにふさわしいものに作り替えなければならない」

「穴を掘るにはスコップ、庭掃きには箒とそれぞれやることに応じた道具がいるのと同じこと」「スポーツでそれぞれの種目に応じた身体作りが必要なのと同じこと」と一般論として説明する。その時は理解できないかもしれないが、その後も折に触れ一般論として言い続

け、上手く弾くには手の構えが大事ということを当たり前と思えるようにする。

個別に注意を与えるときの前提を作っておく。

3）毎回、授業の始めに、学生の表情をよく見る。また、レッスンが終わり教室を出て行く時の表情や態度もよく観察する。そして、笑顔がない、表情が硬い学生には、時には雑談も交えて言葉かけを増やし、気分をほぐして、安心して授業に取り組むことができるよう、質問など発言もしやすくなるよう配慮する。

4）手の形を直すことについては、すでに経験のある学生、長いこと習ってきている学生ほど指導が難しいと感じる。

今やっていることを否定せず「そういう柔らかいタッチで弾くといい曲もあるけど、この曲の場合は、かっちり弾いたほうがいいと思う。いろんな弾き方ができると曲に表情をつけるのが楽になる」

というような言い回しで、多様なタッチがあることを理解してもらい、修正しようという気持を持ってもらう。その後、実際に手をサポートしながら、かっちりしたタッチを体験させて、タッチの違いで音が変わることを納得してもらう。

5）運指について　滑らかに弾けていれば自己流でも直さずそのままにすることが多いが、つっかえたりたどたどしく聞こえる場合には、直すようにしている。

その場合も、本人は弾けていると思っていることが多いので、いきなり修正せず

「アクロバットみたいでえらい難しそうだけど、こっちの方がよくない？私はこうじゃなきゃ弾けないんだけど」と言って実際やらせてみる。大体は「なんだーほんとだー、こっちの方が簡単」となることが多い。

いきなり修正するとそういった素直なリアクションにならず、意地になって前の運指を貫こうとしてしまう場合もある。

6）合格判定について　大体は弾けているけど、もう1週間やればもっと良くなると思われる場合には、合格にしないことは良くある。

学生からするとガッカリなようだが「今はここができてないからこれをクリアすればもっと良くなる」と丁寧に説明することにより大体は納得する。

また、やっとやっと弾くのと、スラスラ弾くのの違いを経験してもらうために、あえてもう1週間宿題にすることもある。その場合も「あと1週間練習すると鼻歌みたいに楽々弾けるようになる」などと説明し意欲を無くさせないようにする。

それとは逆に、全ての曲を完璧にするには時間がかかり、課題数を消化しきれないので、練習してあることが認められ大体できていれば合格にすることもある。その場合には「学校だからこれで合格するけど、仕事だったらまだ使えないなー」と付け加えると「ありがとうございます。合格もらったけど、もっと練習します！」と言う返事が返ってくることがある。

ちょっとした言葉かけにより、今は生徒だけど、仕事だったら自分が先生だ、という気づき、もっと上手くならなくては、という意欲へと繋がっていくようだ。

7）試験曲を選ぶ際には、学生の進度に応じた曲を選ぶことになるが、進んだところよりもっと先をやりたがる学生、前にやった易しい曲にしようとする学生、というように性格が出る。

先の方のものを選びたい場合はよほど、実力不足でない限り頑張ってもらうが、容易にできるもので済ませよう、または進度が達成したからもういいという学生に対しては、一度は「こっちの曲でも弾けると思うけど頑張ったら？弾けたら自分の財産になるし」などの声かけをし、先へ進むことを促す。自分でどうしても無理と思っている場合には、練習にも身が入らないのでそれ以上は勧めないが、大抵はもうひと頑張りするほうを選び、達成感を得る場合が多い。

逆に実力が伴っていないのに先の曲を弾きたがる場合もあり、そういう時には説得に気を使う。「試験だから、より良い演奏になる曲を選んだ方がいい」ということを納得してもらう。

8）グループ内の空気というのも大切である。お互い協力しあって、向上心を高め合っていくような空気作りを促す働きかけをしていく。遅れている学生に対し、練習するようグループメンバーに声かけしてもらったり、進んでいる学生に休み時間などにちょっと練習を見てあげてと依頼することもある。

一人のレッスンをしながらも、なるべくグループへの声かけをし、良い演奏への賛辞を促したり、共通と思われる注意点を話したりして一体感を作る。

9）家での練習については、 レッスン中に手の形や運指を修正することで弾けるようになった箇所も、家に帰ると気をつけるのを忘れてしまったり、やろうと思ってもレッスンの時と同じようにできなかったりする。

指は、１週間に１度気をつけても鍛えられないので、毎日の練習で意識して良いフォームで弾く必要があることを繰り返し話す。レッスン中に、弾けていない時のパターンを確認させて、弾ける時のパターンと比較させ家で再現できるようにする。

せっかくの練習時間を無駄にせずに効率よく上達できるよう、一人の時でも成果のある練習ができるようなサポートをし、練習するのが当たり前な空気を作る。

10）練習してこなかった、あるいは練習が足りなかったと思われる場合は、「今週は何か忙しかったの？」とまず聞いてみる。練習しなかったと認める学生もあれば、聞かれるままに言い訳を始める学生もあり、練習はしたと言い張る学生もある。

練習できなかった言い訳をする学生に対しては、朝早く学校に来たり、休み時間を利用したりして学校で練習することを勧める。

練習をしたという割には弾けていない学生に対しては、いつどれくらい練習したのか聞

いてみる。大体は、前日だけだったり、２～３回しか弾いていなかったりということが判明する。

練習はやろうと思えばできる、今の練習では足りなかった、ということに気づいてもらうための問いかけ、言葉かけをしていく。

11）弾き歌いの練習では始めなかなか声が出せなかったり、息が続かない学生が多いが、「声を出して」というだけでは出せないので「校庭の向こう側にいる友達を呼んでみて」と言ってその場でやらせる。大抵は、体の状態が自然になるので、力の入れどころを自覚でき声が出せるようになる。息が続かないのも丹田が抜けているためなので同じ練習でだんだん息が貯められるようになる。どのような、言い方をすれば、ああそうか、と納得できるのか、できないことをやらされているという感覚を持たずに必要な実技を習得できるのか、工夫が必要である。

12）自分で工夫して練習ができるように、教師の思考の過程を見せることもある。

例えば、うまく弾けない箇所では、「そこは何がうまくいってないのかな」→何回か弾かせる→「あ、わかった！この指が、ペコペコするからだ」→「こうしたらうまくいくんじゃないかな」→やって見せる→注意点に気をつけながら弾かせる→注意深い練習を数回繰り返すとうまく弾ける

という過程を経験させる。自分でどこがうまくいっていないのか考え、レッスンでやったことを思い出し、うまくいくような工夫をする、という練習が家でもできるようにする。

## ６．アンケート結果のまとめ

学生とのコミュニケーションに焦点を当てた指導に、一定の手応えも感じているが、学生の意識と授業の受け止めを調査するため、アンケートを行った。

対象は筆者担当の１年生　29名
２年生　６名　計35名

1）あなたはこの学校に入るまでにピアノを習ったことがありましたか？

| | | |
|---|---|---|
| 子供の時に習った | ３年未満 | １名 |
| | ３年～５年未満 | ８名 |
| | ５年～７年未満 | ２名 |
| | ７年以上 | ４名 |
| この学校に入るために習い始めた | | ４名 |
| 子供の時から今も継続して習っている | | ５名 |
| 全く習ったことがない | | 11名 |

器楽の授業について

2）家での指導については充分だと思いますか？

| | |
|---|---|
| 充分 | 21名 |
| まあまあ | 13名 |
| もっと分かりやすく指導してほしい | １名 |
| 全く不充分 | ０名 |

3）「今日はやる気が出た」というときはありますか？

| | |
|---|---|
| ある | 26名 |
| どちらとも言えない | ９名 |
| ない | ０名 |

それはどんな時ですか？具体的に書いてください。

褒めてもらえた時　10名

全く驚くほど弾けなかった時

もう少しでこの曲がクリアできると言われた時　2名

たくさんアドヴァイスがもらえた時

こうしたらいいとアドヴァイスをもらって上手に弾けた時　2名

違う曲を教えてもらって次に持ってくるように言われた時

課題を克服してきたね　と言われた時

優しい言葉をかけてもらった時

自分では意識できていなかったところを指摘された時

練習を認められた時　4名

家で頑張って練習してきた時

練習したのにうまく弾けず悔しかった時に、この調子で頑張ってと言われた時

前より良くなっているところを具体的に褒めてもらえた時

凄く励ましてもらった時

4)「今日はやる気をなくした」という日がありますか？

ある　10名

どちらとも言えない　10名

ない　15名

それはどんな時ですか？具体的に書いてください。

怒られた時　3名

全然弾けなかった時

自分が思った以上にできていなかった時

空気がとても重かった時

弾けると思った曲が弾けなかった時

書いてある指使いで弾いてと言われた時

前の人が怒られていて流れで機嫌が悪かったであろう日

練習が足りない　と言われた時

一人で練習しても難しくてできなかった時

5）技術面（手の形や指の動かし方）の指導はわかりやすいですか？

よくわかる　21名

まあまあわかる　13名

わかりにくい　1名

全然わからない　0名

6）楽譜の読み方の指導はわかりやすいですか？

よくわかる　17名

まあまあわかる　18名

わかりにくい　0名

全然わからない　0名

7）ピアノを弾くことは楽しいですか？

とても楽しい　8名

まあまあ楽しい　23名

どちらともいえない　4名

あまり楽しくない　0名

全然楽しくない　0名

グループについて

8）あなたの器楽のグループではお互いの上達について協力し合っていますか？

とてもよく協力し合っている　16名

どちらかといえば協力し合っている　19名

どちらかといえば協力し合っていない　0名

全く協力し合っていない　0名

9）グループの友人に具体的にどう協力してほしいですか？

改善した方がいいところにコメントしてほしい

一緒に歌って練習してほしい　４名
曲を聞いて感想を述べてもらう
励ましてほしい　３名
一緒に頑張る　２名
わからないところを教えてほしい　12名
指使いや強弱を教えてほしい
違うなというところを教えてほしい　２名
進んでいる人に注意点を教えてほしい　２名
褒めてほしい　２名
優しく見守ってほしい
近況報告し合う
練習室を譲り合う
初心者が多いので高め合う

10）あなたがグループの友人にできることはどんなことですか？

弾き方のコツのアドヴァイス　２名
自分が気づいた点や教師のアドヴァイスを共有する　２名
曲を聴き合う
一緒に歌う　２名
落ち込んでいるときに励ます　２名
進んでいるところをを教え合う　２名
わからないところを教え合う　４名
楽譜の読み方など教える　２名
授業の雰囲気をよくする
励ます　５名
相談に乗る
一緒に練習する　４名
リズムを教える　４名
指使いがあっているかみる　２名
褒める　２名
練習室を譲り合う
音の確認
応援する　２名

11）これから今以上にピアノを好きになるには、またもっと上達するにはどうしたら良いと思いますか？

練習時間を増やす　12名
連弾をする
好きな曲、歌を弾く　３名
いろいろな曲にチャレンジする　２名
弾ける曲を増やす　２名
音楽を楽しいと思うこと
練習を自己満足で終わらせず、強弱などを気にして練習する
何度も繰り返して練習する
右手だけ、左手だけなど基本的なことをしっかりやる
左手の強化
１本１本の指を独立させる
手、指の形に気をつける
楽譜を早く読めるようにする　３名
ピアノを楽しむ　２名
細かいところを重点的にやって、できないところや苦手なところを減らす
友達の演奏を聴く
指がよく動くようになるような練習を続ける
教えてもらったことを注意して弾く
歌詞に合わせた弾きかたができるように努力する
毎日コツコツ弾いて達成感を楽しむ
雰囲気の良いレッスン

12）講師にメッセージ、質問、もっとこうしてほしいという注文など自由に書いてください。

・成果の手応え

ヘ音記号が読めるようになった

ピアノを弾く時の姿勢が良くなってきた

児童が歌える歌をたくさん練習できたので教育実習で活かしたい

手が潰れずに弾けるようになり弾き方が変わってきた

弾ける曲が増えていくのが嬉しい

だんだん弾けるようになってきて、１年のとき悔し泣きたくさんしたのが無駄ではなかったと思える

・これからの決意表明

これからも頑張ります　　５名

残りの授業を精一杯やっていきます

言われたことを覚えて上達したい

もっとたくさん練習してうまくなりたい

もっとたくさんの曲を弾けるようになって、自分のピアノで、子供達と歌が歌えるようになりたい

次回のテストは止まらずに弾けるよう頑張る

・授業の感想

いつも楽しいです

身になる授業だった

いろいろなことを教えてもらった。教えてもらうたび頑張ろうと思ってピアノが好きになった。

１曲弾けると楽しいと感じる

学校の授業でピアノを教われるのが嬉しい

指の動かし方や、音符の違いなど細かいことを教えてもらえた

なんだかんだ楽しく授業を受けられている

わかりやすい指導だった

・授業への要望・質問

もう少し授業内での練習時間をもらいたい

学生歌、学園歌の練習をする時間が欲しかった

試験で緊張しても大丈夫なように最後の追い込みをしてほしい

先生のピアノが聞きたい

これからも笑顔のあるレッスンを開いてください

もっと褒めてほしい

一人一人のレッスン時間を均等にしてほしい

小指が、どうしても上がってしまう。どうしたらいいですか？

3）4）9）～12）自由記述回答の項で、人数の記載がないものは各１名です。

## ７．アンケート結果についての考察

全体的に見て、指導についての項目では、わからない　と答えた学生はなく、学生の自己評価としては、指導内容を理解しているということになる。実際の実技で、その理解が生かされているか見極めが必要である。

やる気が出た時の自由記述の項目で、特に注目したのは、アドヴァイスをもらえた時、自分で気付かなかったことを指摘された時、という記述だった。注意点の指摘を自分の進歩のためと受け止めることができる柔軟性は重要だと思う。

やる気をなくした時の自由記述で多かったのが「怒られた」時となっている。感情的には怒ってはいなくても、熱が入りすぎて前のめりになると、指導内容が伝わらなくなる上にやる気もなくさせるという実例であり、これからも改善点として気をつけていかなければならない。

「不機嫌」と受け取られるのは、主に、声のトーンや話し方によると考えられるので、コミュニケーションの非言語面にも気を配ることが必要である。

「練習が足りない」と言われてやる気をなくしたという記述がある。必要練習量と、それに対する学生の練習量を数値で表現する指導が不足していたと考えられる。

グループについての項目では、具体的に弾き方を教えあうということと、精神的に支え合うという答えがバランスよく記述されていて、グループレッスンのメリットがよく理解されていると感じた。

上達のためにはどうするかという項目に対する回答では、技術面の向上についての理解、練習の必要性についての理解、授業内での細かい指導についての理解、ができていると思われる記述が多かった。

最後の自由記述では、授業の感想だけでなく、成果の手応えや、これからどのようにピアノを弾いていきたいかの具体的な記述が見られ、予想以上に、ピアノを弾くことを大切に受け止めている学生が多いと感じた。

## 8．まとめ

ピアノに限らず、どんな分野でも以前は根性と気合で上達するというのが普通だったが、昨今は、成果を上げるための科学的なアプローチが研究されるようになった。

そんな中でも特に注目されているのが、コミュニケーション技術である。

コミュニケーションに留意することにより、学生との意思疎通がスムーズになり、上達、向上に対する意識が高まり、結果として練習を自主的にするようになるという、良い循環を目指してきた。

コミュニケーションをよくすることにより、指導する側も、学生も、ストレスを軽減し、より楽しく成果を上げていくことができるということを実感している。

ピアノを弾くことがとても楽しいと答える学生がもっと増えることと、やる気をなくしたことがある、という学生が減ること、学生が現場に立った時に、より良いコミュニケーションを取れる職業人に育つことをさらに目指して、工夫と改善を重ねていきたい。

引用・参考文献

標準音楽療法入門　理論編　日野原重明監修　春秋社
ピアノ奏法　　井上直幸　春秋社
典子のハートフルコミュニケーション　大村典子　音楽之友社
「空気」で人を動かす　横山信広　フォレスト出版
話を噛み合わせる技術　横山信広　フォレスト出版
NLPの基本がわかる本　山崎啓支　日本能率協会マネジメントセンター